



## 日本知能情報ファジィ学会 研究最前線 次世代ロボット「Babyloid (ベビロイド)」開発者 中京大学 准教授 加納 政芳 先生に聞く

中京大学 情報理工学部 准教授 加納 政芳 先生の記事が、[読売新聞オンライン版](#)に掲載されているのをご存じでしょうか。「表情豊か・涙も…お年寄りいやす赤ちゃんロボ」というタイトルで、2011年11月15日に名古屋市で開催された「ロボットシンポジウム 2011 名古屋」で赤ちゃんの世話を体験できるロボットの研究を発表された。

ロボット研究は、すべての作業ができることを目標としていることが多いが、Babyloidを「なんにもできないロボット」として、加納先生は設計された。しかしながら、本当に何もできないロボットではなく、むしろ、人間の複雑な心理状態を表出することを目的としている。具体的に言うと、泣く、機嫌が悪くなるなどの生理的・心理的状态を表出することを通じて、空腹や暇などの状態をロボットが人に要求することができる。人間はそのロボットの要求を解決しようとしてロボットをあやしたり、なだめたりして、コミュニケーションを行うようになる。人間が互いにコミュニケーションを行うことで、信頼関係を築きあげる様子をユーザとBabyloidとの間に実現することができる。このことにより、ユーザの精神状態を安定・改善させることを目標としていると加納准教授は説明する。

加納准教授は、このロボットを利用する対象として、高齢者を挙げている。老年期における身体的・精神的・社会的損失の体験は、健康障害を誘発し、場合によっては要介護状態に至ると考えられる。このような中、2006年には厚生労働省から「高齢者の尊厳を支えるケアの実現」が打ち出された。「介護する側」から「介護される側」へと役割が移行するとき、大きな心理的ストレスを受けていると考えられ、現在の高齢者が抱えている大きな問題の一つになっている。

高齢者が自らの存在価値を見だし、生きがいをもって生活することが重要だと考えられ、そのために、仕事や趣味などの外界との関わりが必要だと、加納准教授はいう。Babyloidの研究は、高齢者が生きがいを見いだすために、「世話されるロ



ット」を提供し、ロボットの世話という新しい役割が与えられると考えている。

すでに、実証実験も2010年10月から2011年1月にかけて行われている。企業と共同開発したBabyloidと高齢者が共に生活し、高齢者が世話をやり、それが心の支えになるかを検証している。つまり、日常生活において支援を受ける機会が多い人が、逆に世話をする立場になったとき、行動にどのような変化が表れるかを調査した。参加した高齢者へのインタビューでは、(高齢者が)支えているつもりが逆に支えられたという結果が得られたという。

加納准教授は、著しい研究実績を持ち、多くの学術論文を執筆され、2010年日本知能情報ファジィ学会論文賞をはじめ、様々な賞を受賞されている。また、日本知能情報ファジィ学会でも、名古屋で開催される2012年第28回ファジィシステムシンポジウム(2012年9月12日、13日、14日)(<http://fss2012.j-soft.org/>)において、プログラム委員長を担当されるなど、多くの学会委員を歴任されている。今後もその活躍から目が離せない研究者の一人である。(文：県立広島大学、市村匠)



日本知能情報ファジィ学会会員  
加納 政芳 博士(工学)  
中京大学 情報理工学部 准教授  
<http://sns.j-soft.org/A06003>  
<http://www.st.chukyo-u.ac.jp/z104123>